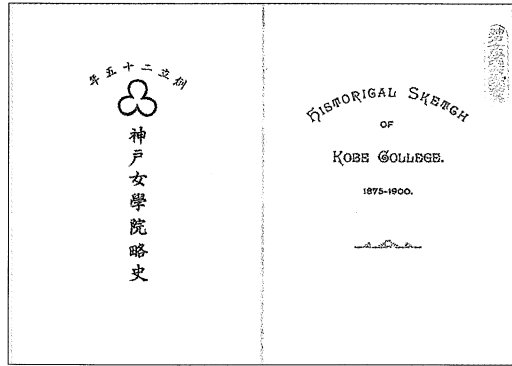


「神戸女学院史」の歴史

若 山 晴 子

学院創立百周年が六年後に迫った時、『神戸女学院百年史』を作るための準備が始まった。一九六九年の初夏であった。この時、「百年史」それ自体については、具体的なことはまだ何も決まっていなかった。しかし創立百周年と言うからには、過去の経験に鑑みて、当然に歴史は書かれねばならぬ、書いて然るべきだ—と考えた人びとの肝煎りで事が起こされた。『神戸女学院八十年史』の執筆・編集に携わった和島芳男先生と、当時アメリカン ボードの宣教師文書（マイクロフィルム）の唯一の提供者でいらした関西学院大学・川村大膳先生の親友の鈴木恒彌先生による史料整備の手始めは、一八九〇年以來の学院の忠実な情報誌である『めぐみ』の項目索引作り・カード化と、前述宣教師文書（手書きの報告書簡）のタイプライティング化であった。『神戸女学院百年史』は「総説」と「各論」の二巻から成り、多数の執筆者を動員し、印刷製本にも工夫を凝らして、ようやく一九七六年に「総説」が、一九八一年に「各論」が、世に出た。しかし今なお時として、あの時点では漁りきれなかった情報、読み解けなかった史料、またそれらの故に生じた誤解、等々に驚かされることがある。後続の学院史にそれらを修正・校訂する機会の与えられることを願って已まない。『神戸女学院の一二五年』はこの責めを果たすには余りにも小規模であった。



裏表紙

表紙

この学校では、創立当初から日々礼拝の時を守り、奨励や講話の折りに学校の記事を語られることは多かったが、ことさらに学校の歴史といつて書き記されたはじめは、一八九〇年、『めぐみ』創刊号「雑録」の項の「本校記事畧」。卒業生・塚本不二、川本辰の連名で、二四四八行の本文に卒業生の氏名が列記されている。創立十五年目のことであつた。

次いで創立二十周年（一八九五年）の祝会を報じる『めぐみ』一二号の記事のあとに「本院の小歴史」二五字一〇七行が来る。執筆者名はないが、祝会のプログラムに「女學院小歴史 塚本不二子」とあるところから、この講話を活字化したものと考えるべきか。

そして創立二十五周年。時の『めぐみ』二五号はまた、「本院創立廿五年記念祝日」の模様を収録しており、このプログラムによれば、ソール院長と山内松鶴教師がそれぞれ英語と邦語で「學院略史」を語つた——とある。なおここで殊に注目すべきは、「世上凡ての集會に食品の饗應に無益の散財をなすをかねて慨^{なげ}き居^おし事なれば今回同窓會の發起にて大に之を矯正し院の畧史を配布して別に茶菓を備へざりき 世評の如何は顧る處にあらず」の一節で（結びの一句は何とも天晴れであるが、この引出物とされたらしい「略史」の表紙を右に掲げる。中厚の白地の洋紙に青色（スクールカラー）に因んだものであらう）の題字も清楚な、縦一八・七五、横一三センチ、全三六頁（巻頭二頁に和漢の祝詩、和文の学院史一六頁、「職員表」一二頁、また巻末より横組六頁ばかりの英文の学院史）、更に「校舎の図面」という薄紙の折込みの入った小冊子である。執筆者名も奥附もないが、前述式典のプログラムの中にこれらに対応し得る項目の見られるところから、式典のための草稿に

基づいて編集されたものと考えられる。和文本文の末尾に「明治三十三年（紀元一千九百年）十一月十二日」と、式典開催の日附が入っている。単行本となつた神戸女学院史の最古のものである。

余談になるが、この式典に列席した兵庫県私立教育会会長・松尾貞次郎師範学校校長の「演説」の臧おほを含んだ言辞は、当時日本の国粹主義の風潮を如実に知らしめ、かえつて学院の気概の程を再認識させるものとなっている。

単行本の形での二冊目は創立四十周年の記念誌である。「めぐみ別冊」と称せられるこの本は、執筆者名も前書きも奥附もなくその本文を「私立神戸女学院四十年沿革史」と始め、「大正五年三月 西紀千九百十六年」と閉じる編

創立四十周年
私立神戸女学院沿革史

紙 表

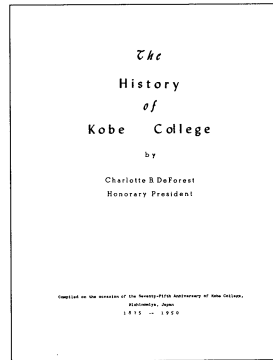
年体の叙述、一七頁。巻頭には写真の部六頁と学院平面図（A3程度の折込み）、本文のあとに名簿その他の資料三六頁。表紙はアート紙風の白紙である。A5版。文末の日附が実際の創立記念日より半年遅れているのはソール先生の健康上の都合で祝会を延期したのに合わせたものであろう。

創立五十年
神戸女学院史
明治三十五年 大正五年

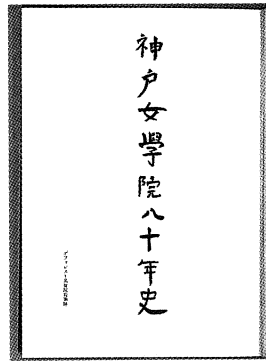
紙 表

創立五十年史は紙表紙ながら、序言、目次、奥附を備えた立派な書物になった。並のA5版にしては心持ち背の高いこの本の表紙は、からし色の地に明るい青の題字で、典雅な趣きがある。本文八九頁、別に写真用に九頁を作つて本文の間に置き、末尾に年表一〇頁、附録として、資産状況や教職員名簿等を二二頁にわたつて収録した労作である。著者はデフォレスト先生の委嘱を受けた卒業生・小西すま氏（大学部三七回）で、出版費は同窓会の負担であるという（「神戸女学院第五十年報 大正十三年—十四年・めぐみ第五号附録」、シ

・ビ・デフォレスト述「神戸女学院の歴史」参照）。同じ頃同窓会は、校地移転を



中表紙（表は紺無地）



中表紙（表は紺無地）

計っていた学院のために明石に土地を買って母校に寄附しようと努めていた。同窓生の活動はめざましいものであった。

創立六十周年はその前年（一九三四年）の岡田山新校舎落成式の賑わいの蔭に隠れたかに見える。七十周年は終戦の直後であった。それから五年経って一九五〇年秋、最後のミッシヨナリー院長デフォレスト先生（当時・名誉院長）の手になる英文の学院史が上梓された。戦後間もない万事不如意の状況下で出されたこの本は、B5のザラ紙に二列組み（各列七七行詰）、タイプの打ち放しをそのまま印刷したらしい粗末な作りではあるが、本文は挿絵扱いの写真を入れて二二二頁、附録三〇頁で、在米中に入手したアメリカン・ボードの原史料などがふんだんに用いられ、また現場の教員・宣教師としての経験が活かされ、充実した学院史に編まれている。はじめの頁に記された "Dedicated to the conservation of old values and to their expansion in

the days to come." という言葉が心に残る。歴史を語るにはこのような心がなければならない。

次に来る『神戸女学院八十年史』は、本職の歴史家の学究的な視点で構成された学院史で、「八十年史の概観／維持管理／教育方針／学校組織／敷地建物／学院生活」と各章毎に主題を決め、三三二頁の本文に、図版・写真・版画三四頁、年表八頁、在籍学籍生徒数のグラフ（折込み）がついている。また、中表紙にデフォレスト名誉院長の筆跡（写真左）、続く二頁に畠中 博名誉院長と神崎驥一理事長の揮毫を掲げ、難波紋吉院長が序文を寄せた。A5版で紺地のハードカバーの背に金文字で表題を入れ、背表紙に金の型押しで校章を入れた。七十五年史と踵を持った出版で

あるが、学院としては、先に出版した本は英文であつて残部も僅かであることから今回の刊行を決めたという。一方八十年史の執筆を委嘱された和島先生は、「仮りに史料を編年的に配列しただけで歴史になるとすれば…何度歴史を書いても同じことであろう。…解釈なき史料の配列は単なる年代記であつて歴史書ということはできない」(あとがき)との見地に立つて、学院の来し方を多面的に論述した。その文体には古典的美文の香が漂っている。

この和島先生を総帥として着手された神戸女学院百年史刊行計画は、その後学院レヴェルの検討にかかつて、編年体の本史のほかに学院史上のいくつかのトピックスを拾つて論じたものも加えたいということになり、更に検討を加

神戸女学院百年史 総説

中表紙

神戸女学院百年史 各論

中表紙

えた結果、編年体の方を「総説」、トピックスを扱う方を「各論」として出版することが決まった。「総説」は監修を和島先生に、編集を渡辺久雄先生に委嘱し、執筆にはこのほかに鈴木先生、三木俊秋先生、長 洋一先生が加わり、河北印刷株式会社の技術に与つて、A5版であ・とがきまで含めて全五〇七頁、ワインカラーの表紙にはソールチャペルの手すり模様を元にした金色の縁飾り、裏表紙には校章の空押し^{かみ}…という美麗本が出来上がった。「各論」の方は岡本道雄院長が取りまとめ役となつて、神戸女学院の教育・活動の諸相や卒業生の文学活動に関して多数の論考を集め、あとがきまで含めて全七〇八頁の大きな本になった。印刷は東洋紙業株式会社であつたが、装丁は「総説」と同じにするという取り決めが出来ていたので、印刷所の協力に与つて双児のような本が生まれた。但しこれらの誕生日は、「総説」が一九七六年十月十二日、「各論」が一九八一年三月十二日と、四年半の開きがあ

り、その版面にも、よく見ると微妙な差異のあるところが面白い。しかし、活版印刷による学院史はここで終わる。これは時代の趨勢である。

西暦二〇〇〇年に神戸女学院が創立一二五年を迎えることは自明であった。しかしこの時学院には、少なくとも学院史に関して、百周年に備えた時のような気運がなかった。執筆の労をとろうという覚悟をもった人物もなかった。前年の初夏、大学の志願者用に「写真のたくさん入った読み易い学院史の紹介」なるものの編集が提案された時、はじめて、大学に限らず学院全体の一二五周年記念事業の一つとしてこういう本を出版することが発議され、実行に移された。「読み易い小さな本」にするために学究的たることを免れて、ようやく、写真の部(二四頁)に、イラストや写真を多用し教員・同窓生方のコラムを含む本文、記念歌、年表等を加えて全一〇〇頁の本が生まれた。『神戸女学院の一二五年』がそれである。その執筆・編集に精励するうち、一つの歌が生まれた。左がそれである。

1. よき音信をたずさえて
浪路を越えて
来た人びとの
大きな愛を受けて
建てられたこの学舎
2. 「神の慈愛を身に受けて
女子たちよ
怖じまどわずに
頭をあげて立て」と
謳い継ぎ、この学舎
3. 世の波風の迫る日は
行く方を示す
主のみ手により
はるかに上を望み
乗り切って、この学舎
4. 世紀の節目2000年に
かぞえた歳は
125年
新たに虹をあおぎ
歩み継ぐこの学舎
5. 真理をたずね知恵を求め
ともに学んで
神と人への
大きな愛を育て
飛び立とう、この学舎
6. 神よ、私たちのこの学舎
神戸女学院を
祝福して下さい。アーメン。



1. よ き お と づ れ を た ず - さ-え て - な
2. か み の じ あ い を 身 に - 受-け て - 「お
3. 世 の な み か ぜ の せ ま - る-日 は - ゆ
4. せ い 紀 の ふ し 目 二 せ ん ね-ん に - か
5. し ん り を た ず ね 知 恵 を も-と め - と



1. み じ を 越 え-- て 来 た ひ と び-と の
2. み な ご た ち-- よ お じ ま ど わ-ず に
3. く え を し め-- す 主 の み 手 に-よ り
4. ぞ え た と し-- は ひゃ く に じゅ う-ご ね ん
5. も に ま な ん-- で か み と ひ と-へ の



1. お お き な あ-い を 受 け - て - 建
2. こ う べ を あ-げ て 立 て -」と - う
3. は る か に う-え を の ぞ - み - 乗
4. あ ら た に -じ を あ お - ぎ - あ
5. お お き な あ-い を そ だ - て - 飛



1. て ら れ た こ の ま な び や -
2. た い つ ぎ、こ の ま な び や -
3. り 切 - っ て、こ の ま な び や -
4. ゆ め つ ぐ こ の ま な び や -
5. び た と う、こ の ま な び や -



6. 神よ、私たちのこのまなびや、神戸女学院を祝福してください。アーメン

『神戸女学院の一二五年』が学究的たることを免れて成ることを許されたのは、当時の状況からすれば、まさしくプロヴィデンスと言うべきであつた。そしてこれがそれなりの効果を待たことも、そうであつたと思う。この小さな本の取り柄は、印刷会社の吝かでない美意識を注がれて成つた仕上りの美しさに加えて、持ち易い、読み易い、場所塞ぎにならない、つまり親しみ易いという点にあつた。豪華な上製本は結局本棚の飾りとなり、それが何巻にも及んではまあ読了されることはなからう——と所感の寄せられたことも一再ではなかつた。史料室などに在つて内外の教育史を論じようなどという時、この本では勿論不足である。もつともその場合、どれほど大きな本になれば事足りるのか。史料集をつけ加えようか。しかし出版する史料の選択はどのように成されるべきか。そして現今のようにコンピュータが急速に進展してゆく中で、今更限られた史料を本にするいわれがどこにあるのか。そうなると……と、私は首をかしげている。今後学院が何周年史かを出版しようと思ひ立つた時、一体どのようなものが求められるのであるか。愛書家や同窓生の本棚の飾りか、研究者向きの百科事典か史料目録か、学院史入門のような小冊子か芸術的な写真集か……。 (写真集と言へば、神戸女学院では五十年史以来、右に述べた学院史の傍らに、いつも小さな写真集を出版したことをつけ加えておこう。『神戸女学院 千八百七十五年 千九百二十五年』『神戸女学院 その歴史を描く 明治八年—昭和二十五年』『目で見る百年 Kobe College 1875—1975』(1979))

しかしいづれにせよ、またいつの日か「学院史」を書き継ぐという心があるものなら、「その時に自分がその場に居るかどうか」よりも、今すでに自分もこの歴史を紡ぎ出しているが故にその事業に一半の責任があると考え、人に出てほしいものである。仮にコンピュータが詳細な年表を作ってくれるようになったとして、「仮に史料を編年的に配列しただけで歴史になるとすれば……何度歴史を書いても同じことであろう。……解釈なき史料の配列は単なる年代記であつて歴史書ということではない」(和島芳男)からである。